

キャッチャー・イン・ザ・ライ  
**The Catcher in the Rye**  
 J. D. サリンジャー / 村上春樹訳



**年** 齢をどれほど重ねてもふと泣きそうな夜というものはある。

傍から見れば迷惑でしかない話なのだが、その原因である主人公の心情と思考が作者の繊細な筆遣いによって克明に描かれていく。



人は大人になるにつれて他人の心に関して無関心になっていきがちだ。他人に心などないように錯覚してしまうこともある。しかし、その無関心さが原因で起こるすれ違いは、いつでも起こりうるものだ。もし貴方が日常の中に転がっているすれ違いに負けそうになったときはこの本を開いてみてほしい。その寂しさを感じているのは貴方だけではないことを、きっと思い出させてくれるだろうから。  
 (蝸牛)

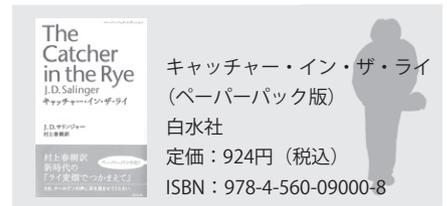
今回紹介する「キャッチャー・イン・ザ・ライ」は、その感情に形を与えた貴重な小説だ。

物語は主人公のホールデン・コールフィールドが高校を退学させられるところから始まる。

住んでいた寮を飛び出し、恩師を訪ねては勝手に失望し、昔のガールフレンドのその後を聞いてがっかり落ち込んだのは、夜の街で上級生相手に喧嘩をふっかける。そういった青春的一幕が物語の中心となっている。

相手の何気ない一言に傷つけられているのだけれど、誰も気づいてはくれない。その悲しさのためにホールデン少年は相手の気持ちを逆なでするような言動をとってしまう。そういったすれ違いは、きっと誰もが重ねていることだろう。その切なさ、寂しさといったものを、作者はホールデン・コールフィールドという少年の目を通して見事に描ききっている。

「大人の視点」から見ると、ホールデン少年がどうして他人の些細な言動にいちいち反応するのか分からず困惑してしまう。しかしその原因であるナイーブな精神は、みんな一度はどこかで感じたことのあるものだろう。年をとっていくにつれて感じることの少なくなる感情を、この小説はそっと思い出させてくれる。



キャッチャー・イン・ザ・ライ  
 (ペーパーバック版)  
 白水社  
 定価：924円(税込)  
 ISBN：978-4-560-09000-8



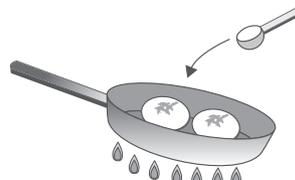
和風 **大根もち**

旬の大根をふんだんに使った料理を紹介します。

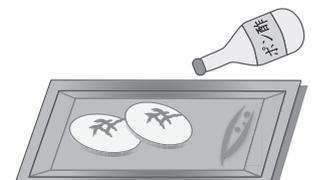
- 材料**  
 (直径8cm、5~6個分)
- 大根 100g(約1/10本)
  - 片栗粉 大さじ4
  - 鰹節 ひとつまみ
  - サラダ油 適量
  - ポン酢 適量



①大根は皮をむいてすりおろし、片栗粉と鰹節を加えもったりするまで混ぜる。



②フライパンにサラダ油を入れて熱し、①を大さじですくい入れて平らに伸ばす。



③両面に焦げ目がつくまで焼き、取り出してポン酢をかける。

はみだし  
 すてーじ

最近「いか京」という言葉を聞かなくなった。京大生≠普通の学生になってきたということだろうか。⇒まず「普通」の定義をしてください。

(経・院 キャクストン)  
 (えっと、僕は普通ですけど；編)